

昔むかし、あるところに、まずしいお母さんが、息子のジャックと住んでいました。お母さんは雌牛めうしを一頭ひとかっけていて、毎朝、雌牛の出すミルクを市場へ売りにいってくらしていました。

ところがある朝、雌牛がミルクを出さなくなっていました。お母さんは、

「ああ、どうしよう。これからどうやってくらしていけばいいんだろう」といいました。ジャックは、

「くよくよしないで、母さん。ぼくがどこかで仕事を見つけてくるよ」といいました。お母さんは、

「前にもやってみたけど、だめだったじゃないか。こうなったらもう、雌牛を売って商売でも始めるよりほかないよ」といいました。

「分かった、母さん。きょうは市の立つ日だから、すぐに雌牛を売りにいくよ」

ジャックは、雌牛をつれて出かけました。

いくらも行かないうちに、なんだかおかしなおじいさんに会いました。

「おはよう、ジャック」

ジャックは、

(どうしてぼくの名前を知ってるんだろう) と思いながら、「おはようごぎいます」とあいさつしました。

「どこへ行くんだね、ジャック」

「この雌牛を市場へ売りに行くんだよ」

「ああ、そうかい。ところで、豆を五つどうやって数えるか分かるかな」

「両手にふたつずつと口にひとつ」と、ジャックはすぐに答えました。

「そのとおり」

おじいさんは、ポケットから、見たことのないきみょうな豆をいくつか取りだしていいました。

「おまえはなかなかりこうだから、この豆とその雌牛を取りかえてやってもいいぞ」

「なんだって。ばかばかしい」と、ジャックはいいました。

「ははあ、これがどんな豆か知らんのだね。夜まいとけば、朝にはつるが空までとどいていのさ」

「ほんとう？」

「ほんとうだとも。もしそうならなかったら、雌牛は返してやるよ」

ジャックは、

「よし、分かった」といって、雌牛をおじいさんにわたし、かわりに豆をもらってポケットにしまいました。

ジャックはもどっていきましたが、たいして遠くまで行かなかったので、日がくれないうちに家に帰りつきました。

お母さんは、

「おや、早かったね、ジャック。雌牛が見えないけど、売れたんだね。いくらになったんだい」とききました。ジャックは、

「母さんには、きつとそうぞうもつかないよ」といいました。

「まあ、いい子。じゃあ、五ポンド^{*}? 十ポンド? 十五ポンド? まさか、二十ポンド?」

「いいや、この豆さ。夜まいとけば、朝にはつるが空までとどいているんだって」

「なんだって」と、お母さんはさげびました。「あんないい雌牛を、こんなつまらない豆と取りかえるなんて。こんな豆、まどからすててやる。ジャック、おまえはベッドへ行つておしまい。今夜はごはんも水もぬきだよ」

ジャックは、屋根うらの自分の小さな部屋にあがっていきました。お母さんにはしかられるし、ばんごはんぬきだし、悲しくてたまりませんでした。

でも、しまいに、ねむってしまいました。

つぎの朝、目をさますと、部屋はとつてもへんでした。お日さまはあがっているのに、部屋の中は暗くてかげつています。ジャックはとび起きて服を着、まどまで行ってみました。すると、何があつたと思いますか。なんと、きのうお母さんがまどから投げすてた豆がめを出して、つるが大きな木になって、空までとどいていたのです。

豆の木は、まどのすぐそばだったので、ジャックは、まどを開けて木にとびつき、はしごみたいに登っていきました。登って、登って、登って、登って、登って、登って、とうとう

空まで行きました。すると目の前に、広くて長い道がまつすぐのびていました。ジャックはその道を歩いていきました。どんどん行くと、とてつもなく大きな家に着きました。入り口に大きな女の人がいきました。

「おはようございます。おばさん」と、ジャックはいていねいにあいさつしました。「朝ごはんを少しだけませんか」

女の人は、

「朝ごはんだった？ここにいたら、あんたが朝ごはんになってしまうよ。うちの人は人食い鬼で、男の子をやいて食べるのが、何より好きなんだ。すぐに帰ってくるよ」といいました。

ジャックは、ゆうべばんごはんを食べてなかったの、おなかがぺこぺこでした。

「ああ、おねがい、おばさん。何か食べさせて。きのうの朝ごはんからあと、何も食べてないんです。うえ死にするくらいなら、やかれて食べられたほうがましだよ」

大男のおかみさんは、それほど悪い人ではありませんでした。それで、ジャックを台所に入れて、パンとチーズとミルクをくれました。ところが、半分も食べないうちに、ズシン、ズシン、と大きな足音がして、家がぐらぐらゆれだしました。おかみさんは、「まあ。うちの人が帰ってきたよ。急いでかまどの中にかくれるんだ」といって、ジャックをかまどにおしこみました。そこへ、大男が入ってきました。

大男はものすごく大きくて、ベルトに子牛を三頭もぶら下げていました。その子牛をテーブルに投げだしていいました。

「おい、こいつを朝ごはんにやいてくれ。おや、なんだこのにおいは。」

ふん ふん

生きてる人間の血のにおいがする

生きていようが死んでいようが

そいつのほねをくぐらしてパンにのせて食べてやる」

おかみさんは、

「だれもないよ。おまえさん、ゆめでも見てるんだ。それとも、きのうのばんごはんの男の子のにおいが、のこってるのさ。さあ、手と顔をあらってきれいにしておいで。子牛をやいといたげるから」といいました。

大男が行ってしまったと、ジャックはかまどからとびだして、にげだそうとしました。すると、おかみさんがいいました。

「だめだよ。あの人がねるまで待つんだよ。いつも朝ごはんのあとひとねむりするからね」さて、大男は朝ごはんを食べおわると、たんすのところへ行って、金貨きんかのふくろをふたつ取りだしました。そして、すわって金貨を数えていましたが、そのうち、いねむりを始め、しまいに家がふるえるほどの大いびきをかきました。

ジャックは、かまどからそつとはいだし、大男のうでの下から金貨のふくろをひとつぬきとって、豆の木までいちもくさんに走っていきました。そして、金貨のふくろを下に投げ落とすと、ふくろはうちの庭に落ちました。ジャックは、木にとびついて、ずるずる、ずるずるすべりおりにきました。やっと家につくと、お母さんに金貨を見せていいました。

「ほら、ぼくのいったとおりだろ。魔法まほうの豆だったのさ」

ふたりはしばらくその金貨でくらしていましたが、そのうち金貨をぜんぶ使ってしまったました。ジャックは、もういちど豆の木を登って行って、運だめしをしてやろうと思いましたが。

ある晴れた朝、ジャックは早く起きだして、豆の木を登っていきました。登って、登って、登って、登って、登って、あのだい道にやって来ました。歩いていくと大きな家に着きました。入り口におかみさんが立っています。

「おはようございます。おばさん。朝ごはんを少しだけいただけませんか」と、ジャックはいいました。おかみさんは、

「あっちへお行き。あんたが朝ごはんになってしまふよ。でも、おまえ、前にここに来なかったかい。あの日、うちの人が金貨のふくろをひとつなくしたんだけど、何か知らないかい」といいました。ジャックは、

「ふうん、へんだなあ。たぶんぼく、何か教えてあげられると思うけど、まず何かひとくち食べなくちゃ」といいました。

おかみさんは、知りたくて、ジャックを中に入れて食べ物をやりました。ところが、ジャックが食べはじめるとすぐ、ズシン、ズシン、ズシンと、大男の足音が聞こえました。おかみさんはジャックをかまどにかくしました。そこへ大男が入ってきていいました。

「ふん ふん

「ふん、ふん、生きてる人間の血のにおいがする」と、大男はさげびました。「おい。におうぞ、におうぞ」

おかみさんは、

「ほんとかい。もし、金貨のふくろとめんどりをぬすんだあのいたずらっ子なら、きつとかまどの中だよ」といいました。ふたりはかまどにとんでいきました。けれどもジャックはいません。おかみさんは、

「なんだ。またあんたのあやしい『ふん、ふん』が始まった。きつと、あんたがゆうべつかまえて、けさ朝ごはんにやいた男の子のにおいだよ。生きてると死んでるののくべつもないなんて、あんたにもぶくなったもんだね」といいました。

大男は、すわって朝ごはんを食べはじめましたが、ときどき、「やっぱりあやしいぞ」と、ぶつぶついいました。そして立ちあがって、食べ物おき場や、とだなや、そこらじゅうをさがしました。でも、おなべのことは思いつきませんでした。

朝ごはんが終わると、大男は、おかみさんに、

「おい。おれの金のハープを持ってこい」といいました。おかみさんは、金のハープを持ってきてテーブルの上におきました。大男が、

「歌え」というと、ハープは、すばらしく美しい歌を歌いはじめました。金のハープは歌いつづけ、大男は聞いているうちにねむりこみ、やがてかみなりのような大いびきをかきはじめました。

ジャックは、そうつとおなべのふたを開け、ねずみのようにすべり出しました。そして、テーブルまではって行って、金のハープをつかむと戸口に向かって走り出しました。ところがそのとき、ハープがさげびました。

「だんなさま。だんなさま」

たちまち大男は目をさまし、ジャックを見つけて追いかけてきました。

ジャックは走りに走り、大男も走りに走りました。ジャックが豆の木まで来たとき、大男はすぐうしろにせまっていました。とつぜん、大男の目の前で、ジャックのすがたが消えました。大男が道のはしまで行って下を見おろすと、ジャックが死にもぐるいでおりていきます。大男は、

(こんなところ、とてもおりられない)と思って、立ち止まりました。ジャックはかまわず、

ずるずる、ずるずるすべりおりていきました。そのとき、金のハーブが、

「だんなさま。だんなさま」とさげびました。大男は思いきつて豆の木にとびつきました。その重みで木がぐらぐらゆれました。ジャックはずるずるすべりおり、大男もずるずるすべりおりてきました。とうとうジャックは、家のすぐそばまでやって来ました。

「母さん。おの。おのを持ってきて」と、ジャックはさげびました。お母さんは、おのを持って家からとびだしてきました。そして、ぼう立ちになりました。なんと、雲の中から、大男の大きな足が突きだしているではありませんか。

ジャックは地面にとびおり、おのをひつつかむと、ひとうち、豆の木に切りつけました。木はぐらぐらゆれました。ジャックはもういちど切りつけました。豆の木はたおれはじめました。とうとう大男は、落っこちて頭がぶつつぶれ、上から豆の木がどしやあつと落ちてきて下じきになってしまいました。

ジャックは、お母さんに金のハーブを見せました。そして、みんなにハーブを聞かせたり、金のたまごを売ったりして、ふたりは大金持ちになりました。やがて、ジャックはおひめさまとけっこんし、いつまでも幸せにくらしましたとき。

おしまい

* ポンド イギリスのお金の単位 たんい